

# 二千六百年間の歩歩 (一)

## 大 篠 好 邦

光輝燦然としてかゞやく 皇紀二千六百年の紀元節を迎ふるに當り、如何なる心構を以て奉祝すべきか。昔時海大養圓齋は廣大無邊なる 皇恩に感泣して

御民われ生けるしるしあり 天地の

榮ゆる時にあへらく思へば

と歌ふた、今日吾々は皇威八紘に洽く、宇内和平の樞軸を把握する聖代に生れ感激と歡喜とに堪へないものである更らに吾々は、天壤無窮の 皇運を扶翼し奉り我日本帝國の使命を完成せんが爲めに堅忍持久、牢固たる覺悟と不拔の英氣を以て奉公の誠を竭さなければならぬ、之れぞ眞の奉祝である。

人皇第一代神日本磐余彥天皇即ち神武天皇の 御即位は

辛酉の歳大和國橿原に於て行はせらる、時は西曆紀元前六百十年でアツシリア王アツスルバニバルの世で支那は東周惠王の治世である。

先是大和國に長髓彦といふ者あり孔舍坂で皇軍を防ぎ皇兄五瀨命負傷され男水門で亡くなられ給ふた、皇軍利あらず迂回し紀伊の國を経て再び長髓彦を撃ち大勝を博せられ給ふたので、磐余彦命は皇軍激勵のお歌をよまれたと傳へらる。

稜威みつし久米の子等が

粟生にはからみたと莖

其が根莖其根芽繋ぎて

繋ちてし、止まん

みつみつし久米の子等が

垣本に植ゑしはじかみ

口響く吾は忘れじ

繋ちてし止まん

神風の伊勢の

大石に蔓延もとほろふ

細螺のいはたもとほり

繋ちてし止まん

と。日本書紀に依れば御即位に際し詔あらせられ給ふた即

ち次の如し

即位建國の大詔

我れ東を征ちしより茲に六年になりぬ。皇天の威を頼りて、兇徒就戮されぬ。邊土未だ清まらず、餘妖尙梗しと雖も、中洲の地に復た風塵無し。民心朴素なり。巢棲み穴住む習俗惟常り。夫れ大人の制を立つ、義必ず時に隨ふ。苟くも民に利有らば、何ぞ聖造に妨はむ。且た當に山林を披拂ひ宮室を經營りて恭みて寶位に臨み。以て

元元を鎮むべし。上は則ち乾靈の國を授けたまふ徳に答へ、下は即ち皇孫正き養ひたまふ心を弘めむ。然して後に六合を兼ねて以て都を開き八紘を掩ひて宇と爲むこと、亦可からずや。夫の畝傍山の東南檣原の地を觀れば、國の塙區か。治るべし。

二年 論功行賞

五年 天富命房總の地に楮麻を植ゆ

九年 埃及アツシリアより獨立す

十三年 支那では齊の桓公管仲を周に入艘せしむ

十八年 支那では齊の桓公卒す

二十年 希臘人碇を發明す

三十一年 神武帝諸國巡幸高丘に上り地形を見給ふ

秋津島の名起る

三十二年 歐洲ではコリントの制海權甚た振ふ

四十一年 希臘人イソツプ生る、ドラコーの法典出づ

四十二年 神停名門耳尊を皇太子とす

四十五年 ローマでは元老院議員を三百名とす

五十一年 埃及國ではネコニ世ナイル河と紅海との疏通

民主政治となる

大工事を起したるも成らず

七十年 楚の莊王卒す

五十五年 莊王周の大夫に鼎の輕重を問ふ

七十五年 ユダヤ王國滅亡

六十七年 ソロンの法典成る、アテネは寡頭政治を廢し

七十六年 神武天皇崩御

### 明治天皇御製

新らしき年を迎へて富士の嶺の

高きすがたを仰き見るかな

萬民こころあはせて守るなる

國に立つ身ぞうれしかりける

廣き世に交はりながらともすれば

せまくなりゆく人ごころかな

思ふこと思ふがまゝに言ひ出づる

おさなごころや誠なるらむ

神代より受けし寶をまもりにて

治めきにけり日のもとづくに